

Dear Dirty Dublin: ジェイムズ・ジョイスの都市

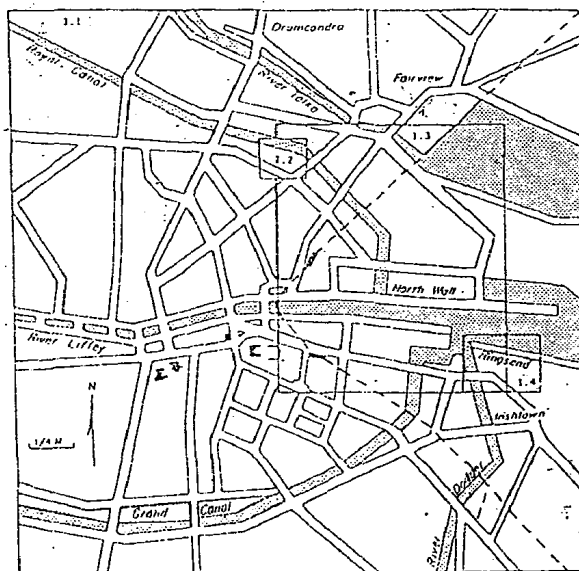
永原和夫

James Joyce は 1882 年にダブリンに生まれ、1941 年にチューリッヒで死んだアイルランドの作家です。彼は 1922 年出版になる *Ulysses* や 1939 年の *Finnegans Wake* で世界を驚かせた今世紀最大の実験的作家ですが、どんなに深く人間の意識に探りを入れようと、言語を溶解、融合し複雑な神話的技法を用いようと、彼が生まれ、育ち、そして捨てた都市を離れることはありませんでした。彼の書くもので彼の経験になかったものはなに一つないといっても間違いありません。Joyce は記憶を掘り起こし、新聞、劇場のパンフレット、電車の切符など集められるものはなんでも集め、地図と *Thom's Official Directory of Dublin City and County* で確かめ、それでも足りない場合は友人や親戚の者に現場まで行って実際に見てもらい、彼の街をできる限り忠実かつ克明に再構築しました。C.P. Curran はジョイス追悼文で、「もしダブリンが崩壊したら彼の言葉から再建できる、もしこの街の人が抹殺されたら彼の作品から補充できる」と言いましたが、それは必ずしもこの種の文章にありがちな過分な褒め言葉ではありません。今日は、Joyce が 1904 年から書き始め 1914 年に出版された、初期の短編集 *Dubliners* に納められている二つの作品、“An Encounter” と “Two Gallants” とを少し詳しくお話しし、Joyce が「自発的追放者」特有の愛と憎みをこめて “Dear Dirty Dublin” と呼んだ彼の都市をどのように描いているか見てみようと思います。

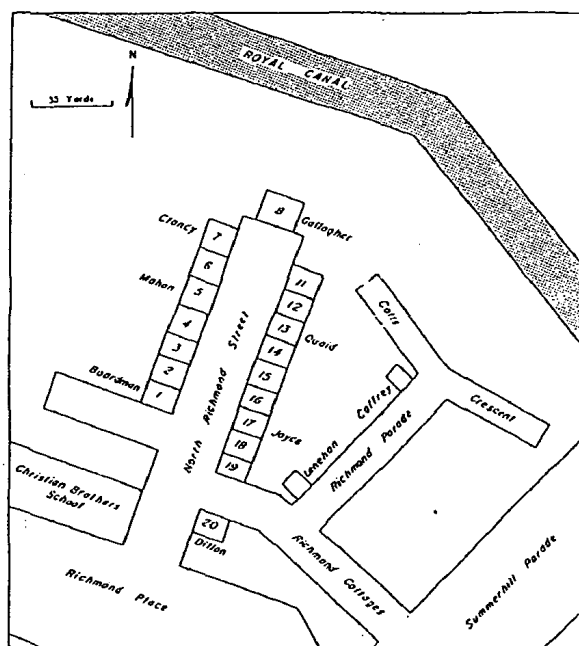
“An Encounter” は、James Joyce の弟 Stanislaus Joyce によると、Joyce が 13 歳の頃、Stanislaus と Belvedere College を怠けて休んだ時の体験にもとづいた作品です。当時 Joyce は、両親をはじめ 9 人の兄弟姉妹と一緒にダブリン市の北東に当たる North Richmond Street に住んでいたのですが、こ

の通りは *Dubliners* の最初の三つの短編 (“The Sisters”, “An Encounter”, “Araby”) の主人公である一人称の少年が東方への脱出を試みる想像上の場所になっています。

“North Richmond Street, being blind” という言葉で “Araby” は始まっていますが、三方を箱のように囲まれたこの袋小路 (Map 1.2) は、*Dubliners* 全編を貫く精神的閉塞状況を地形的に表しています。高い煉瓦作りの家が、少年をしっかりとその中に閉じこめるように、通りの両側に一列に並んでいます。半月形の明かり取りが付いた玄関と上下に開ける窓一つの客間からなる、間口の狭い3階建ての家が同じように反復するくすんだ茶色の建物の外見は、建築上の装飾や変化が全然なく、鉄柵が小さな四角い地下勝手口を囲んで歩道との境に埋められています。Joyce が住んでいた17番の家の裏庭は藪が茂り、そこには “Araby” の墮落したエデンの園に描かれている “a central apple tree” が立っていたと、Stanislaus が証言しています。うしろの暗いぬかるみの路地を抜けると、「灰落としの穴の臭気が漂う、暗い露の滴る庭の木戸や、馬車屋の馭者が馬をこすり梳つていたり、びじょう金のある馬具を快くひびかせる」Cotts Crescentに通じます。袋小路の突き当たりには青い瓦屋根の2



Map 1.1. “An Encounter”



Map 1.2. North Richmond Street

階建ての家が一軒はずれて立っており、North Richmond Street の南西の入り口には Christian Brothers School が見張っています。学校が生徒を家に帰す時だけ一時期、通りの静寂が乱され、Joyce にはそれがダブリンの麻痺した生活の仕組みの一つに見えました。Christian Brothers の向かいに Joe と Leo が住む Dillon 家があり、その裏庭で “An Encounter” の少年たちはインデアンの戦争ごっこに興じ、学校の束縛から一時の逃避を求めています。この物語で冒険に同行する Mahony は、5 番の Mahon 家の子供の 1 人ということになっています。

彼らの他にも North Richmond 界隈の多くの人々が Joyce の作品に出てきます。“The Sisters” で聖盃を壊してから「どこかおかしくなった」牧師、James Flynn 神父のモデルは、Joyce の母方の親戚に当たる頭が少しおかしくなって教区を失った Joseph Murray 師であるとするのが定説ですが、No. 13 North Richmond Street には 1894 年の聖職者名簿から消えている Quaid という神父が住んでいました。Joyce 家の向かいに Eddie と Eily Boardman が住んでおり、彼らが “Araby” の Mangan 家の姉と弟になり、鉄柵に乗せた彼女の白い手やゆっくり動くスカートを街灯が照らすのを、“Araby” の少年は表の客間の鎧戸の隙間から見ていました。Edy Boardman は Richmond Parade に住む Cissy Caffrey と彼女の双子の弟、Jacky と Tommy、と一緒に *Ulysses* の「ナウシカア」挿話に現れます。7 番には副執政官事務所に勤める John Clancy が住んでおり、Long John Fanning として *Ulysses* に登場し、*Finnegans Wake* では実名で出てきます。突き当たりの一軒家は Gallagher 家の邸宅で、その家の Gerald 少年は Joyce と同じように Belvedere College にかよっており、*Ulysses* の「さまよえる岩」挿話で Conmee 神父が話しかける生徒の 1 人です。*Dubliners* の “Little Cloud” に現れ、*Ulysses* の風神「アイオロス」挿話で辣腕振りを噂される Ignatius Gallaher は、Mr Joe Gallagher の弟で、Phoenix Park 暗殺事件を *The New York World* に流して有名になったダブリンの新聞記者、Fred Gallagher にもとづいているといわれます。“Two Gallants” の「たかりや」Lenahan は、*Ulysses* でもバーにいる友

人たちに如才なく近づき、一座の周りで機敏に立ち回りただ酒を飲んでいる破廉恥な競馬の予想屋ですが、少なくとも彼の名前を Joyce は Richmond Parade の Lenehan から借りています。

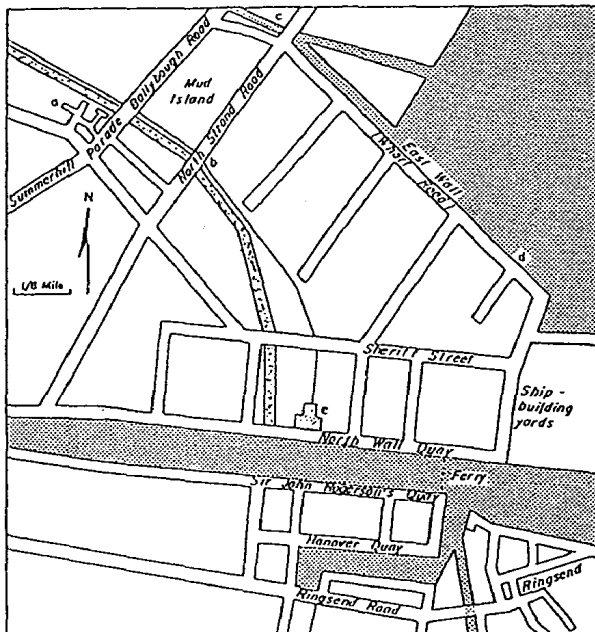
“An Encounter”で、「夕方の戦争ごっこも、終わりには朝のきまりきった授業と同様に退屈なものとなり」、本当の冒険を求める気持ちが少年を、航海と軍隊と聖書を連想させる東方の要塞に駆り立てます。こうして彼は Mahony と Leo Dillon を誘い、学校を1日さぼって朝早く Newcomen Bridge で落ち合い、フェリー・ボートで Liffey 河を渡り、南防波堤を1マイル半歩いて Pigeon House へ行く計画を立て、3人は6シリングずつ拠出し準備を整えます。あらゆるものが停滞し麻痺している *Dubliners* で “An Encounter” は脱出が実際に試みられる唯一の例です。

彼らの目的地である Pigeon House は、Liffey 河の南岸壁がイギリスや大陸航路の拠点であった18世紀に Pigeon なる男が建てた宿泊所で、悪漢や無法者、革命分子の溜まり場としてとかく噂のあった場所でした。定期船が Howth 港を使うようになり、1813年に政府はこの宿泊所と隣接する施設とを買収して、海から外敵を守るためではなく、国内の反乱軍に備えバリケードをめぐる要塞兼倉庫として使用していましたが、1897年から Pigeon House はダブリン市の発電所の敷地になっていました。

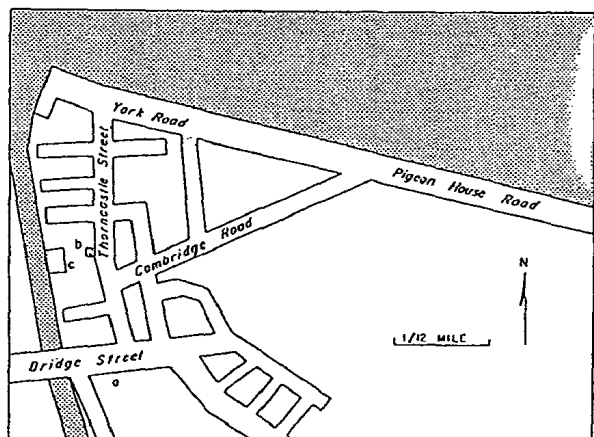
このような歴史的背景をもつ Pigeon House は少年たちの目的地として幾重もの暗示を含んでいます。Pigeon を単に一羽の鳥と考えれば、それから飛行とか、さらには逃避をも連想できます。Pigeon House がイギリスやヨーロッパ大陸航路の拠点であったことを考えると、主人公の Pigeon House への探求は現実逃避、さらには異国への憧憬を表します。W.Y. Tindall や M. Magalaner といった批評家は、マタイ伝(3:16)の「神の御霊の鳩のごとく、光のごとくわが上にきたるを見給う」を根拠に、鳩は聖霊の伝統的な象徴であり、発電所の光と力は神を暗示するといっています。“An Encounter”の少年が“The Sisters”や“Araby”の少年のように孤児であると仮定し、*Ulysses* のテーマが父親捜しであることを考慮するなら、Pigeon House を神なる父

かあるいは実の父親と同一視することもできます。更に、この作品には3種類の雑誌、3人の少年、3本マストの帆船、3時、3人の女の子と3という数字が目立っているのは、三位一体と関係があると指摘する批評家もいます。このような解釈にしたがうと、「バトラー神父やカレジの聖職者たちがピジョン・ハウスにきっこない」というのは、アイルランドのカトリシズムに対する作家の痛烈な皮肉になります。Pigeon House にまつわる聖書的な象徴はともかく、それが出発の拠点であると同時に、アイルランド人を国内に閉じこめるバリケードでもあったということは、少年たちの冒険の暗い結末をも暗示しています。

さて、North Richmond Street のすぐ後ろが Royal Canal ですので、“An Encounter” の少年が集合所に決めた Newcomen Bridge へ行くには、Summerhill Parade の橋の下をくぐり、Charleville Mall に並ぶ運河沿いの遊歩道を通り、North Strand Road に出るのが一番近道です。彼は教科書を家の裏庭に隠し、Cotts Crescent から運河に向かったのでしょうか。Mahony は学



Map 1.3. 'An Encounter': (a) North Richmond St; (b) Newcomen Bridge; (c) Vitriol works; (d) Smoothing iron; (e) North Wall Station.



Map 1.4. 'An Encounter': (a) Grocery in Ringsend; (b) Huckster's shops in Ringsend; (c) Empty fields overlooking the Dodder river.

校へ行く振りをして Belvedere College がある西へ曲がり、一回りして南から Newcomen bridge に近づいてくるのを、少年は橋の笠石に座って待っています。

Leo Dillon は怖じ気づいて現れません。2人の少年は彼の6ペンスを没収することに決めて、Annesley Bridge から Wharf (now East Wall) Road に向かって North Strand Road を北に歩いて行きます。彼らのルートはかつて Mud Island と呼ばれていた Tolka 川の低湿地帯を通過して行きますが、St John Joyce の *Rambles Near Dublin* (1890) によりますと、そのあたりは19世紀の半ばまで掬摸、強盗などあらゆる種類の無頼の徒が住みつき200年もの間官憲も近づけない無法地帯でありました。Mud Island にまつわるこのような法を逸脱した悪の雰囲気を利用して、Joyce はこの物語前半の学校をずる休みして冒険に出かける少年たちの高揚した感をいやが上にもたかめているのです。それはダブリンに住む人たちにとってはすぐに気づくことですが、われわれは少年たちの行程を地図の上で辿り、書物を読んでその必然性を納得しなければなりません。

この物語の退廃と変態のテーマが初めて暗示されるのは、少年たちが Annesley Bridge に近づき Joyce が硫酸工場のことを述べる時です。Tolka 川沿い立つこの工場はダブリン・ウィックロー肥料会社のものですが、その腐食性の液体から発する汚臭は、天気が蒸し暑くなり、Pigeon House へ行く望みが薄されるにつれ、次第に強くなります。Tolka 川の軟泥地帯、黴びたビスケットやチョコレート、Ringsend の汚い漁師町、汚水溜のような Dodder 川を見おろす荒れ地、これらすべてが灰白色の口髭をたくわえ、緑がかった黒い服を着た変態男との遭遇を用意しているのです。

Wharf Road は惨めなスラムで、Mahony はパチンコを振りかざして襤褸を着た女の子を追いかけて、義侠心にかられた男の子たちに石を投げられ、“Swaddlers!” と罵られます。Swaddlers とは新教徒に対するもっとも口汚い罵りの言葉ですが、ダブリン市内の有名なイエズス会の学校 Belvedere College に通う2人の生徒が、アイルランドの貧しいカトリックを襲うイギリス

の新教徒に間違われているのです。Smoothing Iron まで来ると、彼らは攻撃をしかけるのですが、2人では包囲作戦が組めず失敗に終わります。Smoothing Iron というのは、Merchants' Road の突き当たりにあった海水浴場の飛び込み用の石のことですが、古風な火熨斗に似た形をしているところからこんな名で呼ばれていました。少年たちの戦争ごっこはこの辺りの Liffey 河口に上陸したヴァイキングや Cromwell の軍勢と戦ったアイルランド人の歴史を思い出させます。

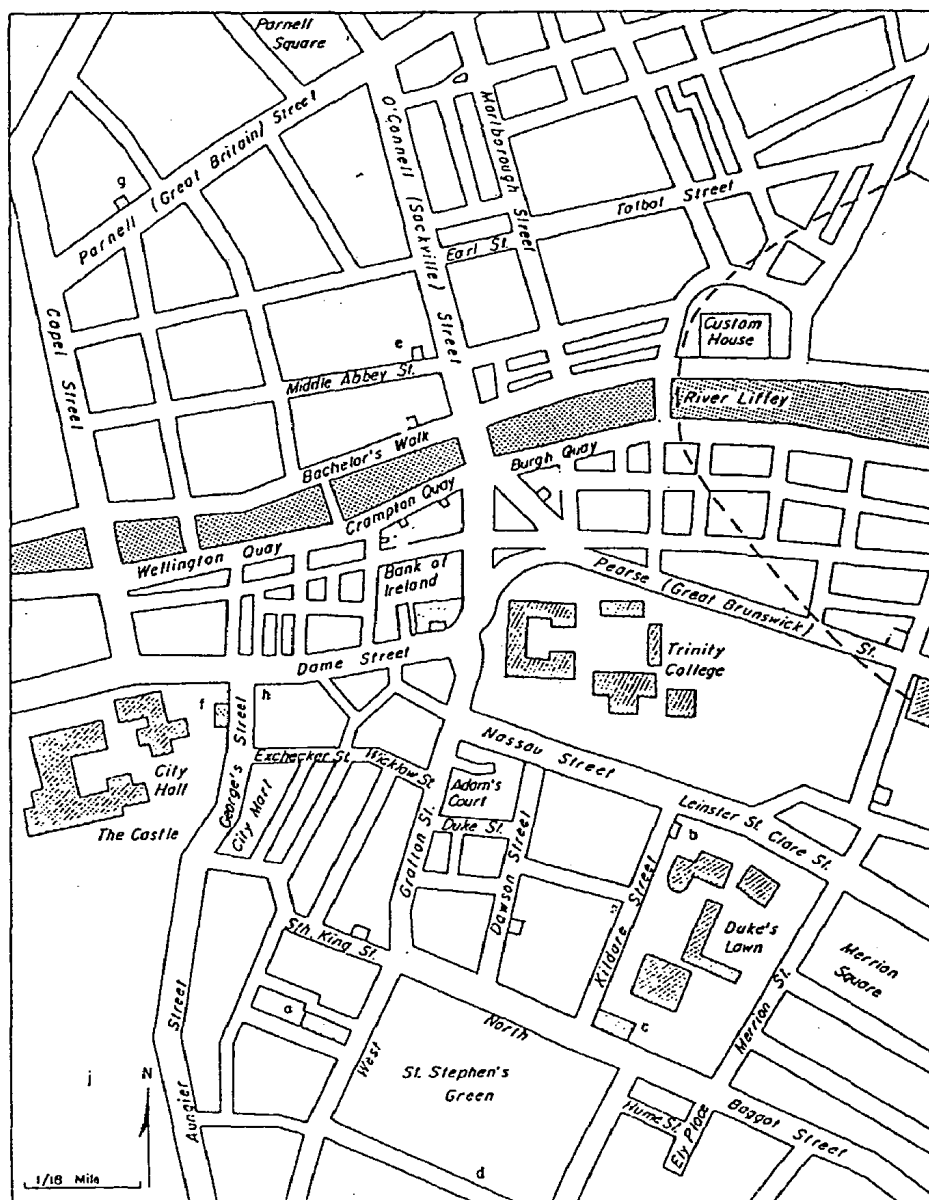
2人は高い石壁沿いに騒々しい河岸通りをぶらぶら歩いて、正午に North Wall Quay に着きます。彼らは乾葡萄入りのパンを食べながら、川縁の鉄管に腰掛けダブリンの交易風景を眺めて楽しんだ、と書かれているのですが、このあたりの Joyce の散文は、遠くから思い出して書いているように妙に具体性を欠いています。反省的な精神状態が再帰動詞で表され、能動的な動詞はまったくなく、船の荷揚げさえ実際に起きているというより、状態として見られている。動くものといえば遠くのはしけの「もくもく昇る煙」くらいで、すべてが停止し、ダブリンの交易は麻痺したように不活発に書かれているのです。

彼らはハー・ペニーの代金を払って渡し船で Liffey 河を越えて、対岸の Sir John Rogerson's Quay に着き、ノールウエー船の荷揚げに見あきると、Britain Quay の端ずれから、水門に並べた板の歩道を通って Grand Canal を渡り、Dodder 川沿いに南下し Bridge Street を通り、ぶらぶらと Ringsend 地区に入っていきます。天気は蒸し暑くなってきますが、2人はまだ Pigeon House へ行く望みを捨てず、Bridge Street の食料品店で買った黴臭いビスケットとチョコレートをかじりながら、漁師が住む貧しく汚い Thorncastle Street へ曲がり、行商人の店でいちご水を一瓶ずつ買い求めます。それで元気が出ると、Mahony が猫を路地に追いつめ、気がつくやうに少年たちは Dodder 川を見おろす空き地にいた。この突然西に曲がり荒れ地に出るというのは、彼らの冒険が失敗に終わるのを象徴的に示しているのですが、その地名も巧みに選び取られています。少年は学校の権威主義の退屈な教育を抜け出して

冒険の旅に出たのですが、Ringsend すなわち日常生活の輪の端ずれまできて、Dodder 川の畔で足が萎えてしまったと言うわけです。

物語はここで終わってもよかった。「惨めな思い」を噛みしめながら、彼らがそこから脱出しようと試みた命令に服従するために汽車に乗る、疲れきった少年たちの押し黙った後ろ姿を最後に終わってもよかった。ところが冒険の本来の目的が失敗した後に、落ちつかない話し方をする変な服装の老人が現れ、計画外の冒険に遭遇するのです。

大抵の批評家はこの老人を変態男とっています。実際、この老人は「同じ軌道をゆくりとぐるぐる回っている」ように“love”とか“whip”といった言葉を何度も反復し、変態と考えられても仕方がない行動をするのですが、彼の病は人生の活力に満ちた反応が狭まり、小数の習慣的反復と先入主に閉じこめられてしまったことにあります。かつての愛と欲望が少年を鞭打つ強制的な空想に変わってしまったのです。男のまとまりのない話は次第に熱を帯び願望的思考になっていきます。「もし男の子が女の子に話しをしていたり、女の子を恋人にしていたりするのを見つけたら、鞭でさんざん打ってやる……これまでどんな子もうけたことがないひどい鞭打ちをくわえてやりたい、世の中で何が好きかといってもこれほど好きなものはない。彼は、こういう子どもをどういう風にして鞭で打つかを、何かこみいった秘義を説き明かしてみせるように、こまごまと述べた」。愛がその反対の暴力に変わってしまった、変態したのです。Mahony はこの男を“jossor”と言っています。「変な奴」ほどの意味ですが、Pidgin English では God, 神を表すそうです。もしそうだとしたなら、この神は愛を説く神ではなく、暴力に取りつかれた神であります。少年はその呪文のような同語反復におじけづいて、立ち上がります。この「暗緑色の目」をした老人はしじゅう“a man” “the man” と三人称単数の代名詞で呼ばれています。これは、彼が特定の間人というより、アイルランドの禁欲的な宗教にうちひがれ、厚い自我の壁のなかを歩きまわるだけで外に出られない無気力な人間、精神的に枯渴したアイルランドとその首都ダブリンを象徴的にあらわしているともいえましょう。Wild west の



Map 2.0. “Two Gallants”: (a) College of Surgeons; (b) Kildare Street Club; (c) Shelbourne Hotel; (d) The chains around Stephen’s Green; (e) Egan’s ‘Oval’ Pub; (f) Pim’s; (g) ‘refreshment bar’; (h) Waterhouse’s Clock.

読み物と戦争ごっこに飽きて本当の冒険を戸外に求めて旅だった少年は、冒険物語で読んだことのない本当の現実に出会ったのです。

“Two Gallants” は下働きの女中を騙して金をまきあげる街のあぶれ者の話ですが、この作品でもわたしたちは、“An Encounter” の老人の独白と同種類のとりとめない、反復的な円環運動に出会います。この短編の冒頭部分は、

夏の終わりも近い日曜日の夕暮れのなかを歩き交う人の群れを、同じ語を微妙に位置をずらしながら何度も繰り返して描いています。それはまるで群衆が無気力で平凡な生活を送り、ダブリン市の中をぐるぐるまわるだけであることを暗示しているようです。この作品には、「二重の暈に隅どられた月の青白い円盤」から街灯に輝く「一枚の小さな金貨」まで、丸あるいは円環運動を示す語が30以上も使われています。しかし、主人公 Lenehan の行きつ戻りつ、あてもなく歩き回る軌跡がダブリン市の上に3つの完全な円を描くことは、この都市に不案内な読者は、地図に印を付けながら作品を読まない限り、見落としてしまいます。

英雄気取りで軍隊式の歩き方をする知性もなければ定職もない、ましてや道徳観念など微塵も持たない色事師 Corley とそれに蛭のようにつきまとう遊び人 Lenehan の2人の伊達男は、小高い Rutland Square から降りてきたと紹介されます。Rutland Square は現在 Parnell Square に改名されていますが、この地名はさかりの岡とも読めます。実際、ダブリンの地名は Joyce の都合のよいように付けられているみたいです。彼らは Sackville Street を南に下り College Green まで来ると、Lenehan は通りへ飛び出して Trinity College 正面の時計を見上げます。7時20分過ぎだった。彼らは College の鉄柵ぞいに Nassau Street を通り、南に曲がって Kildare street に入ります。St Stephen's Green に渡ると、女が Hume Steet の角に立っているのが見える。Corley が女と出合い Merrion Square と Clare Street の交差点で Donnybrook 行きの電車に乗り込むのを、Lenehan は少し離れて見えています。Donnybrook は中世以来、有名な定期市が開かれていた場所ですが、喧嘩や漁色など風俗を乱すかどで1855年に廃止され、当時は荒れ果てた野原になっていました。卑劣な目的のために女を連れ出すのにこれほど適切な場所はダブリンにありません。

1人になった Lenehan は所在なげに Duke Lawn の鉄柵をなぜながら、Merrion Street を取って返し、St Stephen's Green を東から南へ一回りして、Grafton Street に出て Sackville Street を通り、Rutland Square へ戻

ります。Great Britain Street の軽食堂で少し時間を潰し、Capel Street から City Hall に向かって歩き Dame street へ出て、George's Street に曲がったところで2人の友達に出会って立ち話をします。Lenehan は、Waterhouse の時計が9時45分を指すのを見て彼らと分かかれ、公設市場のところで左に折れ、Exchequer, Wicklow Street を抜け Grafton Street へ出て、St Stephen's Green West の王立医学校の時計があるところまで来ると10時を打つところだった。彼は、Corley が早く帰るようなことがあるといけないと思い、急いで公園の北側を通り Merrion Street の角に戻ってきます。

「2人の伊達男」の地名や道標は、同じところを行ったり来たり、堂々めぐりしているうちに墮落していく彼らの生活を暗示するために、正確に方位と位置が選ばれているのですが、極めて特徴的なのは、Sackville Street の南詰めにあり彼らが当然目にする解放者 O'Connell の巨像や、かつてアイルランド議会があった College Green の由緒ある建物、またその前に立っているアイルランドの独立を唱えた Henry Grattan の像など、アイルランド人や愛国者にちなんだ地名や道標がまったく無視され、すべて征服者イギリスに関係のあるものばかりからなっていることです。しかもそれらすべてが18世紀ダブリン植民地社会の放蕩、裏切り、えせ貴族と何らかの関連性のあるものばかりなのです。Donald Torchiana の“Two Gallants”の地理的暗喩に関する研究からいくつか紹介してみましよう。

現在 Parnell Square と呼ばれている Rutland Square は、宰相 Pitt によってアイルランド総督に任命された Charles Manners, fourth Duke of Rutland (1754-1787) にちなんで、1791年に開発された北の高級住宅地ですが、英国との合同を主張するオレンジ党が最初の本拠地を置いた土地で、悪名高い軍人政治家 Henry Lawes Luttrell (1743-1821) や、総督に買収されて合同法案に賛成したロタンダ病院長 Frederick Jebb を思い出させます。Sackville Street はアイルランド総督を務めた Lionel Cranfield Sackville, first Duke of Dorset (1688-1765) を記念する通りですが、ダブリンではむしろ息子の Lord George Sackville ゆかりの「裏切りと恩賞」の大通りとして記

憶されています。彼はフランスにおける Minden の戦いで、度重なる攻撃命令に従わなかったために軍法会議にかけられましたが、George III のとりなしで子爵に任じられたといわれます。Nassau Street は、言うまでもなくオランダのナッソー家につながる William III, Prince of Orange にちなんで命名された屈辱の通りです。1690 年アイルランドはボイン河で William III の大軍に大敗し、1695 年以降 18 世紀にかけてカトリックの権限を剝奪する悪名高い異教徒刑罰法を受けいることになるのです。ダブリンで最も賑やかな通り Grafton street は、Charles II が Barbara Villiers, Duchess of Cleveland に生ませた Henry Fitzroy, first Duke of Grafton (1663–1690) の名を取っていますが、若くして死んだこの伊達男は、カトリックの側に立つ James II を捨ててオレンジ公ウイリアムに味方した男として、アイルランドでは人気がありません。

この短編にはまた金銭にまつわる地名がたくさん使われています。女と待ち合わせの場所である Hume Street は、土地投機で巨額の利益を得た軍医総監 Gustavus Hume の豪邸があったところです。Capel Street は、1672 年から 77 年までアイルランド総督を務めた Arthur Capel, Earl of Essex を記念する通りですが、ここは James 王の造幣所があり Dublin Castle へ通じるかつての目抜き取りでした。City Hall はダブリン市の行政府ですが、18 世紀末には王立取引所として使用されていました。George Street を左に曲がった通りには、イギリスの銀行家の名前がつけられています。この物語の最後で、Corley が掌を平いて女から巻き上げた金貨を Lenehan に見せる Ely Place は、3 万ポンドの賄賂を受け取って合同法案に賛成票を投じた Lord Ely の豪邸があったところです。「見さげはてた裏切り者だ」(Base betrayer!) と Lenehan が言いますが、アイルランドの歴史は裏切り者の歴史です。

Lenehan が歩きまわる通りには、かつての大英帝国のなかでもジョージ王朝時代の建物が、華麗な室内装飾も含め、もっともよく残っており、ダブリン観光の花形ルートなのですが、Joyce はまるで恨みをはらすように、イギリ

スの不在地主がアイルランドの農民を搾取して建てたこれら堂々とした邸宅や建造物を完全に無視しています。Upper Sackville Street を挟んで東側には豪壮な Gresham Hotel, 西側に間口 223 フイト, 高さ 50 フイトの中央郵便局があり, その前にはネルソン塔も立っていたはずなのに, 女のことに夢中になっている Corley と Lenehan の目に入ません。Trinity College が出てくるのは, この大学が Elizabeth I の勅許によって創立されたイギリス支配階級の知的牙城であったからで, それも時計の附属物として触れられているだけです。この短編に時計がなん種類も出てくるのは, 円環モチーフの一つだからです。Charles II が勅許を与えた王立医学校の時計が 10 時を打ちます。Joyce が通ったカトリックの大学 University College of Dublin は, St Stephen's Green の南側にあるのですが, その前を通る Lenehan の意識には登ってきません。Ely Place には George Moore の家があり, Merrion Square の南には “Araby” を *Irish Homestead* 誌に掲載してくれた George Russell (AE) の事務所があったのですが, 両方とも無視されています。Shelbourne Hotel が述べられているのは, 1798 年の反乱を鎮圧するために派遣されたイギリス軍が宿舎に使ったホテルだったからです。

Joyce は, 「日曜日の人の群れとハープ弾きとキルデア通りとレネハンはアイルランドの原風景だ」といっています。“Two Gallants” のハープ弾きが, 小さな輪になった聴衆に「静まれ, おおモイルの海よ」の曲をものうげに弾いているのは, 合同派の新教徒だけが出入りを許されていた Kildare Street Club の前です。この曲は Thomas Moore の *Irish Melodies* の中の一節で, ハープ弾きは, 魔法をかけられて自由を奪われたフィオノーラの娘 (つまりアイルランド) の悲しみを, イギリス支配の拠点に向かっていかにも倦み果てたように訴えているのです。ハープはアイルランドの国民的楽器で, その栄光と誇りを代表する国章であります。それが今大道芸人の手に弄ばれ, いじくりまわされて, 自堕落な女のように「覆いが膝のまわりに落ちている」のを気にしないというのですから, これはもう街の伊達男 Corley に騙されて金をみつぐ下働きの女中そのものです。Corley はまた慎重に警部補の息子

といわれていますので、ここに Anglo-Irish に陵辱され収奪されるアイルランドの構図ができあがります。あるじの手に気まぐれにかき鳴らされるハープは、その哀切な音の余韻のなかに、ながい間イギリスに支配され、搾取されてそれに屈従し、反抗においてさえ発作的に、無効果に、いわばヒステリックにしか行動できないアイルランドの精神的に麻痺した民衆をも含みこんでいるように思えます。Lenehan はそんなダブリンに反抗するのでもなく服従するのでもない、皮肉な冗談をとばしてわずかに体面を保ちながら市内を徘徊する蛭のような男だというのは、もしもダブリンに留まっていたらこうもなっていたらと想像して書かれた、Joyce の自嘲的自画像とも取れます。

Dubliners は地獄の記録だといわれます。横光利一は『上海』を書きましたが、この市民も希望など持ちようがなく、通用するのは金と死ぬことで、そこも汚物と腐肉の地獄でありました。地獄が何かは、*A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) の Stephen Dedalus にまかせよう。あえてこんなことを持ちだしたのは、Joyce がダブリンは「麻痺の中心」(the center of paralysis) だといったことを改めて考えてみたかったからです。Joyce のダブリンは、希望を失った少年、挫折した神父、変態男、女を騙すより能のないあぶれ者、職場での失敗の腹いせに子供を殴る父親、バンシーでも聖霊でも役にたつものならなんでも信じる母親、亡霊のような老婆、シニックな銀行員と実務的な牧師たちが住む街です。Yeats のダブリンでも O'Casey のダブリンでもない。Joyce は支配階級の華麗な社交場を描かなかったが、犯罪都市も描かず、ましてや殺しなど描けなかった。スラムと裏切り者の都市ダブリンの、やがて *Ulysses* の Leopold Bloom の視野にとりいれられる平凡な人々は、イギリス帝国とローマ・カトリック教会の二重の枷で自由を奪われ精神が麻痺した哀れな、だが愛しい人々でありました。T.S. Eliot がロンドンの人を冷たく斬り捨てたようなことは、Joyce はできなかつたのです。

追記：本稿は北海道英文学会主催英米文学講座「文学と都市」(1993年7月2日、北海道大学)で行った講演原稿に加筆したものである。*Dubliners* のテ

キストは Jonathan Cape, 1956 年版を用い, 地図は Bruce Bidwell & Linda Heffer, *The Joycean Way* (Dublin, 1981) から借用した。その他の主要参考文献は次の通りである。Ellmann, Richard *James Joyce* (New York, 1982); MacLoughlin, Adrian *Guide to Historic Dublin* (Dublin, 1979); Senn, Fritz “An Encounter” in *James Joyce’s Dubliners*, ed. by Clive Hart (London 1969); Torchiana, Donald T. “Joyce’s ‘Two Gallants’: A Walk Through the Ascendancy” (*James Joyce Quarterly*, VI).